

論文 | Article

近代消費生活における個人・ライフスタイル
—近現代遺跡の事例から—

The Individual and Life Style in Modern Consumption Habits
:Case Study of Archaeological Sites of Japanese Modern Age

櫻井 準也

SAKURAI, Jun'ya

尚美学園大学
総合政策学部教授
Shobi University

2022年6月

Jun.2022

近代消費生活における個人・ライフスタイル —近現代遺跡の事例から—

櫻井 準也

The Individual and Life Style in Modern Consumption Habits :Case Study of Archaeological Sites of Japanese Modern Age

SAKURAI, Jun'ya

[要旨]

わが国では、近年の近現代遺跡の発掘調査によって多くの遺物が出土している。出土した遺物は、発掘された地域の歴史を語るとともに当時の消費生活を反映する貴重な資料である。また、近現代遺跡が他の時代の遺跡と異なる特徴は、そこで暮らし、遺物を保有していた居住者に関する詳細な情報が得られる点であり、関係者に対する聞き取り調査が可能である点である。そして、近現代遺跡から出土した遺物は、居住者の身分や階層だけでなく、個人のライフスタイルを表象する資料として捉えることができる。本稿では、詳細な居住者情報が得られたわが国の近現代遺跡の事例を紹介し、居住者情報と出土遺物の関連について述べたうえで、物質文化研究としての近現代考古学の可能性を示した。

キーワード

消費生活、近現代遺物、階層、個人、ライフスタイル、近現代考古学、物質文化研究

[Abstract]

In our country, a lot of archaeological remains are excavated by archaeological excavation of sites of modern age in recent years. The excavated remains are the precious material which reflecting the consumption habits together with telling the local history of the area. And the features of the site of the modern age which differs from the sites of the other age is that detailed information about the resident who lived in the site and held the excavated remains can collect. At the same time, the interview to the concerned person is possible. And the archaeological remains of modern age which are excavated from the residential area can be regarded as material which carry out representation of not only the status and social stratification but individual life style of the resident. In this paper, I introduce the example of the sites of the modern age in our country which resident information was obtained and described the relation of resident information and excavated remains, and finally showed the potentiality of the modern archaeology as material culture studies.

Keywords:

consumption habit, archaeological remains of modern age, social stratification, individual, life style, modern archaeology, material culture studies

1. はじめに

残された記録や実際に使用されたモノ（物質資料）からわが国の近現代における消費生活実態を探る方法には様々なものがある。例えば、近現代におけるモノ（生活財）の所有状況を探る試みとして、歴史学や民俗学の分野で財産目録や家計簿などの文献史料の調査や雑誌記事に掲載された台所道具や家具等のリストを分析した研究事例がある。家財道具のリストと数量が示されている農家の財産目録（香月 1986）や農業団体による家財道具調査結果（津田 2003）、さらには『家庭之友』や『婦人之友』といった当時の婦人雑誌に記載された家財道具等のリストの分析（小泉 1995）などである。これに対し、モノの所有に関するフィールド調査を実施して同時代の人々の生活実態を客観的に把握しようとした試みもみられる。その代表的な調査（悉皆調査）が大正時代末期から昭和時代初期にかけて今和次郎らによって実施された考現学調査の中の「個人所有全品調査」（今・吉田 1930）である。その後、今らが行ったフィールド調査が継承されることはなかったが、1970年代後半になると栗田靖之（栗田 1977・1978）、疋田正博（疋田 1986）、真島俊一（真島 1986）、倉石忠彦（倉石 1990）などによって、アパート・農家・団地などにおけるモノ（生活財）の所有調査が実施された。また、今世紀になると都市部における日常生活を記録した写真集（都築 2003・2005、ベレッタ ピー 07 2007 など）や東京に住む様々な職業の若者の消費生活（日記とともに食事や商品の購入代のリストを表示している）を記録した書籍（WEB アクロス編集室／パルコ（編）2003）が出版されている。

これに対し、考古学の分野では近現代遺跡の発掘調査によってわが国の近現代における消費生活について探ることが可能であるが、その役割を担うのが近現代考古学である（櫻井 2004a、メタ・アーケオロジー研究会 2005、鈴木公雄ゼミナール（編）2007、櫻井 2018b）。わが国の近現代遺跡の発掘調査は 1970 年代頃から一部の遺跡で実施されるようになり、1980 年代後半から徐々に発掘調査事例が増え、1990 年代には関東地方を中心にその数が一気に増加していった。しかしながら、2000 年以降になると近現代遺跡の発掘調査事例は減少しており¹⁾、この状況を打開してゆくためには、近現代考古学の学問的意義の提示、目的意識をもった調査・研究が必要である。かつて筆者は、近現代考古学に期待される成果として主に生活史の立場から、①文献記録の乏しい地域あるいは記録を残さなかった階層の人々の生活を発掘資料を用いて復元すること、②発掘された遺物群やその組み合わせ（アセンブリッジ）の変化から、その地域や特定集団の生活様式の変化（近代化や西洋化）の様子を読み取ること、③遺物の廃棄行動やライフサイクル、使用痕の分析などから過去の人間行動の復元を試み、人とモノとの関係を明らかにすること、④学際的な研究に心がける

1) その理由として、1998（平成 10）年の文化庁通達の影響があげられる。文化庁はその通達で埋蔵文化財として扱うべき遺跡の範囲として、近現代の遺跡については「地域において特に重要なものを対象とすることができる」としているため、近現代遺跡が地域の歴史を特徴づける極めて貴重な存在であると認められる一部の遺跡を除き、通常の近現代遺跡が調査され、報告される事例は減少した。

ことにより、他分野や一般社会に対して考古学の存在とその有効性を訴えることをあげた(櫻井 2004a)。これらの近現代考古学に期待される成果を具体的に示した背景には、近現代考古学が戦跡考古学や産業考古学など特定のテーマに特化した分野としてではなく、生活史や社会史の立場から日本の近代化や近現代生活の実態を解明する研究分野であること、さらには人文・社会科学の諸分野との関係の中で人とモノとの関係を探る「物質文化研究」(メタ・アーケオロジー研究会 2005)として近現代考古学を位置づけようとする意識があった。そして、このような方向で近現代考古学研究を実践するためには、従来のように出土した近現代遺物の編年の問題を中心に検討するのではなく、その地に居住し、遺物を保有・使用していた人々を消費者として捉え、消費者である居住者の身分や階層、あるいは個人の趣味嗜好やライフスタイルの問題を議論の俎上に載せる必要がある。

本稿ではこうした観点から、実際に発掘された近現代遺跡の調査事例を紹介しながら、わが国の近現代における消費生活の実態について若干考察してみたい。

2. 考古学における個人と消費理論

(1) 考古学における個人の研究

欧米を中心に学問としての考古学が認知されるようになり近代考古学が成立したとされるのは 19 世紀中頃のことであるが、その後発展していった考古学研究の中で出土遺物の研究については、まず時間軸となる遺物の編年を確立したうえで、集団間や地域間の差異や特徴を把握し、その文化的社会的背景を探ることに終始してきた。そのため、特定の人物の墓の副葬品や歴史上著名な人物に関わる発掘資料を除くと、考古学の分野においては研究対象とする地域や時代に関わらず、発掘された資料についてそれを保有していた個人の問題に関連づけて議論されることは稀であった。これに対し、欧米においては 1970 年代頃から考古学における個人の問題について関心がもたれ (Hill and Gunn 1977)、その後もこの問題についての議論は続いているが (ギャンブル 2004、Knapp and van Dommelen 2008、Thomas, McCall and Lillios 2009)、現在の考古学研究の中で中心的な研究テーマとはなっていない。

このような考古学における個人の問題は、研究対象とする時代や出土遺物によってその状況が大きく異なる。例えば、先史考古学や原史考古学においては石器・土器・埴輪などの道具製作に従事した製作者(個人)を想定することができるが、残念ながらこうした製作者個人の問題については必ずしも重要な研究視点として扱われてこなかった。しかしながら石器研究においては石器製作技法や製作技術に関する研究が進展する中で、1990 年代頃から石器製作者個人の特定や個人の技能の問題に踏み込んだ分析や研究が実践されるようになった²⁾。その背景には石器製作に関する実験考古学的研究が組織的に実施されるようになり(石器技術研究会編 2004)、その研究過程で必然的に製作者(個人)の技能という分析視点が醸成されてきたことがあげられる。これに対し、わが国の縄文土器製作に関わる研究においては 1970 年代から土器表面に施された文様の分析から文様の施文プロセスが解明されてきた。

2) 例えば、Karlín と Julien は、ヨーロッパ後期旧石器時代のマグダレニアン(マドレーヌ)文化の石器製作に関して、熟達度や個人的特性としての「知識」や「ノウハウ」、「癖」や「気まぐれ」の存在を想定し、石刃生産のパリエーションが技術的熟達のレベルによるものであるとしたうえで「見習い期間」の存在を示唆している (Karlín and Julien 1994、櫻井 2004b)。

その中には明らかな失敗作も含まれており（鈴木 1981）、こうした分析視点は縄文土器製作者個人のクセや能力といった問題に繋がるものである。また、近年では、弥生土器などの製作に関わった個人の同定法についての研究が進められており、今後の研究成果が注目される（中園・平川 2013、中園 2017 など）。

これに対し、歴史考古学の分野では文献調査によって遺跡に暮らしていた居住者を特定するという先史考古学とは異なった個人に対するアプローチが可能である。このうち、1960年代末に提唱され 1980年代後半以降になって東京都内を中心に遺跡の発掘調査が盛んに実施されるようになった近世考古学においては、文献調査によって発掘調査の対象となった地点の居住者に関する情報を入手することが可能である。しかしながら、発掘調査によって出土した遺物が、そこで暮らしていた特定の家族や個人と直接結びつくことは稀であり、通常は残された絵図や文献史料によって判明した居住者情報を参考にしながら、検出された遺構やそこから出土した遺物群について考察を加えることが一般的な研究手法となっている。

（2）近現代考古学と消費理論

これに対し、近代以降の遺跡の場合はその地に居住していた家族や個人のレベルの情報を入手できる可能性が高い。そのため、近現代考古学では従来の考古学ではあまり議論されてこなかった個人の消費選択のあり方をめぐる諸問題、特にモノ（商品）の消費活動に関する諸研究やその背景にある階級や階層、あるいは個人のライフスタイルによるモノ（商品）の消費のあり方に関する研究も考慮すべき重要な研究テーマとなってくる（櫻井 2007a）。

例えば、ダグラスとイシャーウッドは支出慣習によって社会階級が規定され、職業と所得のグループ分けが可能になると述べるとともに、商品の普及には一定の法則がみられると指摘している（ダグラス&イシャーウッド 1984）。また、ブルデューは、文化に関わる有形・無形の所有物を「文化資本」と定義したうえで、文化的財の消費選択を通して社会的階級の趣味（嗜好や美的価値）が生産されることを「文化的卓越化」と表現し、これによってライフスタイルが生成されると論じた（ブルデュー 1990）。さらに、ラントとリビングストーンもライフコースの段階と個人の社会的な要求により商品が消費されると述べたうえで、消費のあり方がライフスタイルやアイデンティティを示す指標になることを指摘している（Lunt & Livingstone 1992）。

これに対し、近代的消費の変遷を歴史的に検討したマクラッケンは、消費財は文化的意味をおびており、その意味が存在するところとして、①文化的に構成された世界、②消費財、③消費者個々人をあげ、「世界からモノへ」そして「モノから個々人へ」と意味が転移するとし、その意味構造として存在する階級、地位、性別、年齢、職業などの文化カテゴリーは消費財によって実体化され、理念や価値観といった文化原理も消費財によって実体化されるとしている（マクラッケン 1990）。また、マクラッケンはモノの消費のあり方に関して従来議論されてこなかった概念として、消費財の「古光沢（パティナ）」、「キュレイターの消費」、「ディドロ効果」といった興味深い概念を提示している。

このようなモノ（商品）に関わる消費理論は近現代社会の実態を探るうえで示唆的なものであり、近現代考古学だけでなく民俗学・民具学・文化人類学など近現代の物質資料を扱う分野にとって考慮すべき理論である。

3. 近現代遺物と階層・ライフスタイル

(1) 居住者の階層と出土遺物

近現代遺跡から出土した遺物から当時の消費生活について考える場合、得られた居住者情報と実際の出土遺物を比較検討することは基本的な研究手法である。そして、その違いが居住者の階層によるものであると解釈できる場合がある。ここでは近現代遺跡から発掘された陶磁器にどのように階層差が反映されているか神奈川県内の発掘調査事例を用いて具体的に検討したい。

分析対象とした資料は、三浦半島の海浜部にある三浦市のヤキバの塚遺跡（三浦の塚研究会 2003、櫻井 2007c）、江戸時代以来の観光地で明治時代以降は別荘地としても著名な地方都市である鎌倉市にある長谷観音堂周辺遺跡（宗臺 1995）、そして明治時代になって海浜別荘地として栄えた大磯町の神明前遺跡から発掘された資料³⁾である。なお、今回検討する出土資料（陶磁器）は大正時代から昭和時代前期頃に使用・廃棄されたと推定されるものである。

まず、漁業や農業に従事していた人々が暮らしていた海浜集落におけるモノ（生活財）の廃棄場（多量の貝類が廃棄されているため近現代貝塚という表現も可能である）であるヤキバの塚遺跡の出土資料は2層および3層（大正時代から昭和時代初期頃）から出土した資料である。ここでは陶磁器として磁器を中心に湯呑み碗・飯茶碗・鉢・皿・蓋・急須などが出土しているが、手描きのものは少なく型紙摺絵や銅版転写、ゴム版絵付けなどの資料が多く、色絵磁器が少なくいなど安価な陶磁器がほとんどである。また、皿は中皿や小皿が主体で大皿はほとんどみられないこと、洋食器がほとんど含まれていないことも特徴である。次に、鎌倉市の市街地で長谷観音近くにある長谷観音堂周辺遺跡では、ゴミ穴に転用された便所穴（土壇3）から1923（大正12）年の関東大震災の後片付けに伴って捨てられたモノ（生活財）が多量に出土している。このうち陶磁器は、磁器87点（碗・鉢・皿・蓋・香炉・水注・蓮華・玩具・便器）、陶器6点（碗・皿・播鉢）の他に土製の壺・釜などが出土している。ほとんどが和食器であるがティーポットや洋皿などの洋食器も含まれている。磁器は手描き・型紙摺絵・銅版転写による絵付け資料であるが手描きのものが主体を占めており、色絵磁器は比較的少ない。また、この中には近世に製作された陶磁器も一定量含まれているが、興味深い出土傾向として近世に製作された食器には大皿や鉢が目立つのに対し、五寸皿・小皿・飯茶碗・湯呑み碗・蓋などは明治時代中期から大正時代頃に製作された資料がほとんどであることがあげられる。

最後に、大磯町の神明前遺跡は旧佐土原藩島津家の別荘があった地点であるが、発掘調査の結果、近現代の面からは多数の土坑、煉瓦を用いた施設、土管を用いた導水施設等の遺構が検出されている。このうち、第7～11号土坑から和食器として湯呑み碗、飯茶碗、鉢、井鉢、中・小皿、小杯、土瓶、洋食器としてティーカップ、ソーサー、プレート（皿）など、大正時代後期から戦中頃にかけて製造された陶磁器製の食器が多数出土している。洋食器の占める割合は全体の約1～2割程度であるが、製造メーカーの裏印（バックスタンプ）のある高級食器（日本陶器（ノリタケ）、東洋陶器、日本硬質陶器、マイセン）が多く含まれている。

3) 大磯町教育委員会のご厚意で出土遺物を実見させていただいた。

表 1 近代遺跡出土食器の比較（大正期～昭和前期頃）

遺跡名	所在地	遺跡の性格	洋食器	大皿	色絵磁器	高級食器
ヤキバの塚遺跡	神奈川県三浦市	海浜集落	×	×	△	×
長谷観音周辺遺跡	神奈川県鎌倉市	都市市街地	△	○	△	×
神明前遺跡	神奈川県大磯町	別荘地（旧大名家）	○	○	◎	○

また、和食器についても日本陶器（ノリタケ）や東洋陶器などの高級食器が全体の約3割程度を占めており、その他の食器についても比較的上質なものが多く、安価な食器は僅かであった。

このように、同じ神奈川県内にあり、大正時代から昭和時代前期にかけて使用され廃棄されたと推定される資料でありながら、出土した陶磁器を比較すると海浜集落にあるヤキバの塚遺跡、市街地にある長谷観音堂周辺遺跡、旧大名家の別荘地である神明前遺跡では出土した陶磁器（食器類）の様相に明らかな違いがあることがわかる（表1）。これには経済的格差を前提とした当時の階層差が反映されていると推定され、食器など日常的に使用あるいは消費された遺物を比較検討していくことが階層差を知るための有効な手段であることを示している。また、このような階層差という観点から近現代遺物を比較検討するということは、従来の考古学では言及を避けてきた「高級品」や「廉価品」といった資料の経済的価値について言及することに他ならないが、居住者のライフスタイルについて検討するためには経済的価値だけでなく食器の絵柄やデザインなどにみられる使用者の趣味・嗜好、あるいは居住者が所有していたモノ（生活財）の象徴的価値などについても検討することが必要である。

このように、商品経済が発達した消費社会である近現代生活の研究にとって重要な研究課題としてあげられるのはモノの消費をめぐる様々な問題である。また、近現代の消費活動の実態を探るためにはモノの使用価値や交換価値を重視する従来の考え方では対応できない側面も多々ある。しかし、そのような近現代における消費活動に関する研究を展開していくためには、特定の個人や集団が実際にモノをどのように選択し消費していったかを具体的な資料を用いて明らかにしてゆく必要があり、それが近現代における人とモノとの関係を探る起点となる。この点については近現代考古学に期待される部分であり、従来のような出土遺物の製造年代や製造技術、あるいは用途といった側面だけでなく、近現代ならではのモノ（生活財）の消費のあり方を考慮した新たな観点から資料を分析してゆくことが要求される。その結果、居住者の階層や経済状況だけでなく、個人の趣味嗜好やライフスタイルといった問題について検討することが可能になってくるのである。

（2）居住者情報とライフスタイル

次に、近現代遺跡から出土した遺物（生活財）と居住者のライフスタイルの関係を探ることのできる興味深い調査事例として、2001（平成13）年から2002（平成14）年にかけて発掘調査が実施された東京都港区上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の事例を取り上げてみたい（港区教育委員会・株式会社盤古堂2006）。この遺跡では江戸時代の寺院跡や町屋跡が検出され、それに伴って多くの近世遺物が出土している。また、調査区南東部の台地下段部において大谷石を用いて構築された擁壁に沿って配置された遺構群（253号遺構、252

号遺構、152号遺構、154号遺構、245号遺構、284号遺構、125号遺構）から多量の近代遺物が出土している。なかでも遺物の出土量の多かった遺構が253号遺構（図1）であり、そこからは廃棄された近世の陶磁器・土器、近代の磁器（多量の洋食器を含む）、磁器人形、ガラス瓶（飲料瓶・調味料瓶・食品瓶・化粧瓶・薬品瓶・文具瓶）、ガラス製品（グラス・電灯傘・電球）が出土している。

本遺跡が目される点は、土地の登記簿などから当時の居住者が判明したことである。その居住者とは1921（大正10）年から1984（昭和59）年までこの地に居住していたA家であり、本遺跡から検出された近代の遺構群中からはA家に関連する資料が出土している。また、発掘調査を担当した山田仁和氏は近代遺物が廃棄された大正時代末期から戦時中のA家とその当主について文献調査を行い、子孫への聞き取り調査も実施している（山田2006）。

A家の当主は、1884（明治17）年に現在の鳥取市に生まれた。1902（明治35）年に鳥取県立第一中学校を卒業後、上京して明治学院中等部で英語を学び、明治36（1903）年に第五高等学校、1907（明治40）年に東京帝国大学理学部地質学科に入学して、石油地質学を専攻して1910（明治43）年に卒業している。1912（明治45）年には石油会社に入社し樺太・台湾・中国などの油田調査を行っている。その後1914（大正3）年に結婚し、1916（大正5）年に長女、1919（大正8）年に長男が誕生し、大正10（1921）年にはアメリカ・メキシコ出張、本遺跡地である東京芝区へ移転、次女が誕生している。さらに、関東大震災のあった1923（大正12）年に次男が誕生し、1924（大正13）年には中東・ヨーロッパ出張、三女が誕生している。また、大正時代後半から昭和時代初期にかけて早稲田大学、京都帝国大学、九州帝国大学の講師をつとめ、1938（昭和13）年に日本石油取締役、1941（昭和16）年に帝国石油理事、1942（昭和17）年に帝国石油副総裁に就任し、同年に日本地質学会長に就任したが1944（昭和19）年に自宅で死去している。なお、当主死去の21年後の1965（昭和40）年には友人・後輩による追悼文集が刊行されている。

以上の経歴のA家の当主は専門の石油地質学関連の著作を多く残すとともに、野球や学生相撲などスポーツ振興においても活躍した人物であった。その他にも登山や写真を趣味としていたようである。追悼文集によれば、その性格は剛健実直、健啖、親分肌であり自宅に来客が多く、酒肴を供していたという。また、大食漢・甘党であり、鮭・すき焼き・餅が好物であったとされている。昭和時代初期の自宅の部屋はすべて和式の畳敷きであり、西洋趣味ではないにもかかわらず電気冷蔵庫や映写機、電話、扇風機、天体望遠鏡、ピアノ、アコーディオン、ライカ製カメラを所有していたという。

こうした居住者情報に対し、253号遺構を中心とした近代遺構から出土した遺物群の特徴にはこれらの情報と一致する点と一致しない点がある。このうち、居住者情報と一致する点としてまずあげられるのが、284号遺構から出土した次男の名が手描きされた灰皿の存在である。また、253号遺構から多量に出土した磁器人形（ビスクドール）は3人姉妹の存在やアメリカやヨーロッパへの海外出張との関連を想像させるものであり（写真1）、253号遺構から出土したガラス製のコダック社の現像液瓶は当主が写真が趣味で現像・焼き付けも行っていたという情報と一致する。これに対し、居住者情報と一致しない点もみられる。それは和風の住宅に住み、西洋趣味ではなかったA家が所有していた多量の洋食器が出土し

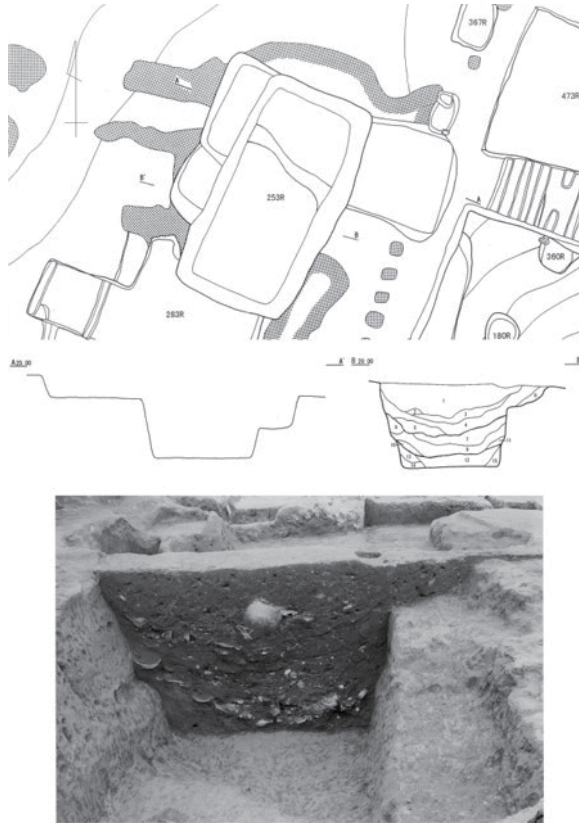


図1 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡 253号遺構（港区教育委員会・株式会社盤古堂 2006）

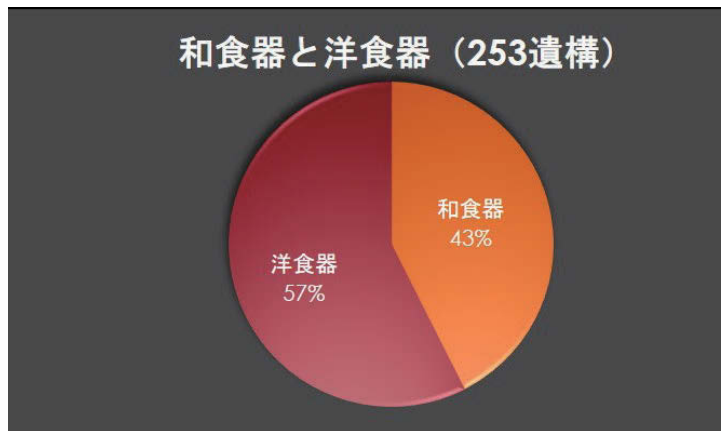


図2 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の和食器と洋食器の割合

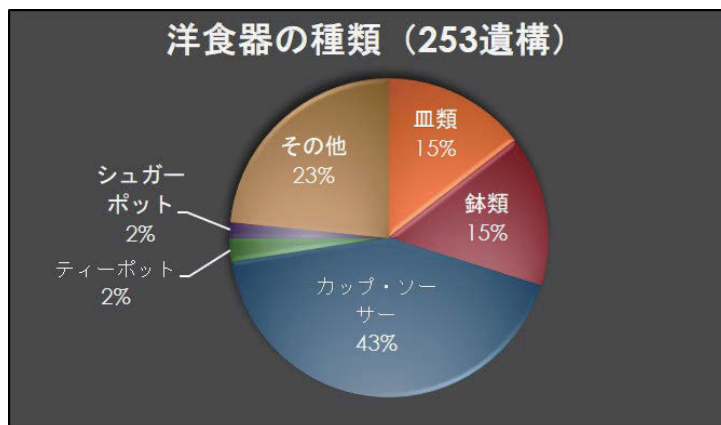


図3 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の洋食器の種類



写真1 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡出土の近代遺物（1）
（港区教育委員会・株式会社盤古堂 2006）



写真2 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡出土の近代遺物（2）
（港区教育委員会・株式会社盤古堂 2006）



写真3 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡出土の近代遺物（3）
（港区教育委員会・株式会社盤古堂 2006）

ている点であり、特に 253 号遺構からは和食器を凌ぐ量の洋食器が出土している（図 2）。これについては「海外出張の多さ」や「夫人の趣味」といった解釈も可能であるが、洋食器の種類別では皿類の割合が低く、カップ&ソーサー類（写真 2・3）の割合が高いことから（図 3）、山田氏の指摘するように、来客が多かった A 家であったため接客のためのカップ&ソーサー類が頻繁に用いられたことが想定できる（山田 2006）。また、A 家では飲食を共にする来客が多かったと思われるが、そのことは「麻布永坂」（寛政年間創業の更科蕎麦店）の蕎麦つゆ瓶が多量に出土していることと関連している可能性がある。

このような 253 号遺構を中心に出土した洋食器や洋風の遺物群は戦間期の社会的な地位が高く経済的にも余裕のある階層（新中間層）に属する家庭の生活の一端を示している。剛健実直で衣服にも執着せず、当時の自宅の部屋はすべて和式の畳敷きで椅子を用いた生活でなかったにもかかわらず、電気冷蔵庫や映写機、電話、扇風機、天体望遠鏡、ピアノ、アコーディオン、ライカ製カメラを所有していたライフスタイルの不統一さに対し、山田氏は伝統的な和風の暮らしに進出してきた洋風の文物や生活様式の混在状況は「和洋二重生活」（和歌森 1980）とも呼ばれ、統一感がなく不経済であるとの批判を当時から受けていたと指摘している（山田 2006）。上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡の調査事例はこのような戦間期における新中間層家庭の「文化生活」の受容実態を反映しているのである。

わが国の近現代において消費されたモノ（生活財）と居住者のライフスタイルとの関係を探る試みはまだ緒についたばかりである。今後は発掘された遺跡の居住者に関する徹底した文献調査や聞き取り調査を実施したうえで、その調査成果と出土した遺物の特徴を比較検討しながら、近現代における人とモノ（物質資料）の密接な関係を解明することが、今後近現代考古学に期待される役割である。

4. おわりに

発掘調査によって検出された遺構や遺物と実際にその地で暮らしていた居住者に関わる様々な記録や聞き取り調査の結果を比較検討することが可能であるという点で、近現代の遺跡は他の時代の遺跡とは異なる性格を有していることは明らかである。ただし、既に述べたように、残された記録と発掘された資料を比較検討することが可能であっても、記録と実際の発掘資料の分析結果が必ずしも一致するという訳ではない。また、聞き取り調査において当時の状況が必ずしも正確に語られるとは限らないことも事実である（櫻井 2007b）。このことは様々な記録が豊富に残っている近現代の遺跡をわざわざ発掘する必要はないとする人々に対する反論となるものであるが、それだけでなく発掘調査によって現代に暮らす我々が想定していなかった当時の慣習や生活実態、さらには通常では考えづらいモノ（発掘資料）と彼らの行動との結びつきが明らかになることがある⁴⁾。また、近現代遺跡の発掘調査によって出土した遺物から居住者（個人）の意外な一面を発見することも期待される。

また、こうした出土遺物と当時の居住者との関係を探る試みは、近現代遺跡だけでなく居住者に関する記録が残っている可能性がある近世遺跡にも適用できることは論を待たないであろう。しかしながら、近世遺跡では被葬者が特定されている墓の副葬品などの例外はある

4) 例えば、1920（大正 9）年に設置された結核療養所であった東京都江古田遺跡が発掘調査され、多量のガラス瓶とともに肉汁瓶が出土している。肉汁は通常調理に使用されるものであるが、当時結核患者が肉汁を飲用していたとされており、これらは入院患者が滋養のために飲用したと考えられる（櫻井 2019）。

が、通常は遺跡の敷地内の土地利用状況（大名屋敷における御殿空間や詰人空間など）から出土遺物の所有者あるいは消費者について推測することは可能ではあるものの、家族や個人レベルで所有者が特定されることは稀である。

これに対し、近年注目される近世遺跡（江戸遺跡）として東京都新宿区四谷一丁目遺跡があげられる。本遺跡は商人や職人の営業と生活の拠点である町屋敷の遺跡であるが、とりわけ6次調査が実施された四谷塩町一丁目の調査区は土地の面積や価格、地主名がわかる沽券絵図や住民の名前や家族構成、出身地や職業がわかる人別書上、さらには関連する人物の記録が残されているため、検出遺構（麴室・地下室・建物跡など）や出土遺物（食膳具・調理具・暖房具・喫煙具・化粧道具・文房具など）との比較検討によって当時の住人の暮らしが詳細にわたって復元できる貴重な遺跡である。そして、新宿区立新宿歴史博物館で昨年開催された本遺跡の企画展示では、町医者、両替・質商、味噌・舂米商の建物配置復元図と実際に検出された遺構図が比較検討され、出土遺物についても塗師の敷地から漆工用具が出土し、質屋の敷地では質屋が保管していたと思われる高級陶磁器が出土するなど居住者の生業と出土遺物を直接結び付けることができるなど、非常に興味深い調査・研究成果が示された（新宿区立新宿歴史博物館 2021）。このように本事例は近世遺跡においても居住者情報に関する詳細な文献史料が残されている場合には、検出された遺構や遺物と当時の家族や個人の間をめぐり議論が可能であることを示している。

本稿ではわが国の遺跡から出土した近現代遺物について居住者の階層や個人のライフスタイルの観点から考察を加えたが、モノの消費のあり方を探るという点では出土遺物に残された痕跡から個人の行動を直接的に復元することができる使用痕研究も有効な分析方法であることを最後に指摘したい。わが国の使用痕研究は1970年代末頃から主に旧石器を研究対象として実体顕微鏡などを用いて実施された研究手法であるが（阿子島 1989）、近代の碗や皿など出土した食器の表面に箸やナイフなどの食膳具によって残された使用痕を観察することができる。また、こうした使用痕の分析によって食器の使用頻度の問題だけでなく、使用痕の種類や方向の分析によって使用された食膳具の種類や使用者の動作を復元することができる。さらに、それによって食器使用者の食事作法（マナー）についても検討が可能になるなど⁵⁾、使用痕研究は近現代考古学においても有効な研究手法として期待される（櫻井 2005・2007d）。

このように、近現代考古学は人文・社会科学の諸分野との関係の中で、人とモノとの関係を探る物質文化研究として位置づけられる分野であり、理論と実践の双方の面から今後発展が期待される考古学の新たな研究分野である。

参考文献

阿子島 香（1989）『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社。

WEB アクロス編集室／パルコ（編）（2003）『トーキョー・リアルライフ 4 2人の消費生活』実業之日本社。

5) 上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡出土の近代の洋皿の中に、洋皿の中心に対してやや右側（右利きを想定した場合）の表面に肉類などを切った際のナイフによると思われる複数の使用痕（線状痕）が集中していることを確認したが、その方向は洋皿の中心に向かうのではなくすべて縦方向に残されていた。西洋マナーに則った場合は洋皿の中心に向かって斜め45°前後の方向に使用痕が残されるため、洋皿の使用者は西洋マナーに則っていなかったことになる。

- 江戸遺跡研究会（編）（2001）『図説 江戸考古学研究事典』柏書房。
- ギャンブル. C. 著, 田村隆訳（2004）『入門現代考古学』同成社。
- 倉石忠彦（1990）『都市民俗論序説』雄山閣。
- 栗田靖之（1977）「物質文化から見た現代家庭」『国立民族学博物館研究報告』2巻4号
- 栗田靖之（1978）「生活財から見たライフ・スタイル研究」日本生活学会編『住生活と地域社会』ドメス出版。
- 小泉和子（1995）『室内と家具の歴史』中央公論社。
- 今和次郎・吉田謙吉（1930）『モデルノロヂオ 考現学』春陽堂。
- 櫻井準也（2004a）『モノが語る日本の近現代生活—近現代考古学のすすめ—』慶應義塾大学出版会。
- 櫻井準也（2004b）「石器の認知」『知覚と認知の考古学』雄山閣。
- 櫻井準也（2005）「近代食器の使用痕分析—食事における動作と作法の復元に向けて—」三田史学会『史学』第73巻4号。
- 櫻井準也（2006）「日常実践としての石器製作—製作者の「判断」の問題をめぐって—」メタ・アーケオロジー研究会『メタ・アーケオロジー』第5号。
- 櫻井準也（2007a）「近現代遺物研究と消費理論」鈴木公雄ゼミナール（編）『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会。
- 櫻井準也（2007b）「聞き取り調査、モノの記憶—近現代考古学の方法をめぐって」小川 望・小林 克・両角まり（編）『考古学が語る日本の近現代』同成社。
- 櫻井準也（2007c）「近現代の貝塚にみる漁民の暮らし—神奈川県三浦市における調査事例から—」文化財保存全国協議会『明日への文化財』57号。
- 櫻井準也（2007d）「下原・富士見町遺跡出土食器の使用痕観察」『明治大学校地内遺跡調査団年報4』。
- 櫻井準也（2010）「モノから日本の近代生活を探る—階層・ライフスタイル—」国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所『国際常民文化研究機構 第2回国際シンポジウム “モノ” 語り—民具・物質文化からみる人類文化—』。
- 櫻井準也（2018a）「発掘された高度経済成長期の消費生活」『尚美学園大学総合政策論集』第26号。
- 櫻井準也（2018b）「中の文化—近・現代—」日本考古学協会編『日本考古学・最前線』雄山閣
- 櫻井準也（2019）「近現代遺跡とガラス瓶」『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房。
- 宗臺秀明（1995）「長谷観音堂周辺遺跡」『平成6年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会
- 新宿区立新宿歴史博物館（2021）『四谷塩町からみる江戸のまち—近世考古学の世界—』。
- 鈴木公雄（1981）「縄文工人の世界<上>」講談社『本』1981年7月号（鈴木公雄（2005）『考古学はどんな学問か』東京大学出版会に転載）。
- 鈴木公雄ゼミナール（編）（2007）『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会。
- 石器技術研究会（2004）『石器づくりの実験考古学』学生社。
- ダグラス. M. & イシャーウッド. B. 著, 浅田彰・佐和隆光訳（1984）『儀礼としての消費』新曜社。

- 津田良樹（2003）「明治・大正期における農村の住環境について－神奈川県農会における村是調査書等を中心に－」神奈川県日本経済史研究会編『日本地域社会の歴史と民俗』雄山閣.
- 都築響一（2003）『TOKYO STYLE』筑摩書店.
- 都築響一（2005）『賃貸宇宙 UNIVERSE for RENT』筑摩書店.
- 東京都埋蔵文化財センター（2020）『四谷一丁目遺跡』.
- 中園聡（2017）「弥生土器製作と製作者」『理論考古学の実践 1 理論篇』同成社.
- 中園聡・平川ひろみ（2013）「人工物から個人にせまる」『季刊考古学』第 122 号.
- ブルデュー. P. 著, 石井洋二郎訳（1990）『ディスタンクシオン』藤原書店.
- ベレッタ ピー 07（2007）『東京外国人 Tokyo Foreigners』雷鳥社.
- 真島俊一（1986）「住まいと道具－佐渡の生活変遷の推定」中鉢正美編『生活学の方法』ドメス出版.
- マクラッケン. G. 著, 小池和子訳（1990）『文化と消費とシンボルと』勁草書房.
- 三浦の塚研究会（編）（2003）『漁村の考古学 三浦半島における近現代貝塚調査の概要』.
- 港区教育委員会・株式会社盤古堂（2006）『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』.
- メタ・アーケオロジー研究会（2005）『近現代考古学の射程～今なぜ近現代を語るのか～』六一書房.
- 山田仁和（2005）「戦間期の新中間層家庭における洋食器の保有状況」鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会『歴史智の構想－歴史哲学者 鯨岡勝成先生追悼論文集－』.
- 山田仁和（2006）「第 253 号遺構及び周辺の近代遺物出土遺構について」港区教育委員会・株式会社盤古堂『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』.
- 和歌森太郎（1980）「洋風生活の普及」『日本生活文化史 第 9 巻』河出書房新社.
- Dobres, M. and Robb, J.(ed.)(2000) *Agency in Archaeology*. Routledge.
- Hill, J.N. and J.Gunn(1977)*The Individual in Prehistory: Studies of Variability in Style in Prehistoric Technologys*, Academic Press.
- Knapp, A.B. and van Dommelen, P. (2008)'Past practices: rethinking individuals and agents in archaeology', *Cambridge Archaeological Journal*, 18 (1)
- Karlin and Julien (1994)'Prehistoric technology: a cognitive science?' C.Renfrew & E.B. W.Zubrow (ed.) *The Ancient Mind : Elementa of cognitive archaeology*, Cambridge Univaersitu Press.
- Lunt, P.K. and Livingstone, S.M. (1992) *Mass Consumption and Personal Identity : Everyday economic experience*. Open University Press
- Thomas, J. (2004) *Archaeology and Modernity*. Routledge.
- Thomas, J.T, McCall G. and Lillios K. (2009) 'Revisiting the Individual in Prehistory : Idiosyncratic Engraving Variation and the Neolithic Slate Plaques of the Iberian Peninsula', *Cambridge Archaeological Journal*, 19 (1) .